

国際経済学科の時代と新たな岐路

学長 岡本 恵也

平成2年に国際経済学科が新設されて今年度で20周年を迎えました。私も国際経済学科設立準備委員会の一員として学科設立に懸命に取り組みました。その時の熱気を今でも覚えています。20年前は経済学部で国際経済学科を設立することはまさに時代の要請にそうものでした。学生達の間にも国際化の時代に向けて語学の習得と異文化体験に積極的にチャレンジしようという熱い空気がみなぎっていました。100名を超える学生を遠くアメリカのモンタナ州の3つの大学に引率することに国際経済学科の教員は四苦八苦しました。そしてそれに応える個性的で優秀な多くの人材を輩出することができたと自負しています。

また設立当初から多くの外国人教員を教授会メンバーとして迎え入れたことは当時としては画期的なことでした。現在でも外国人教員の比率が高い国際経済学科の教授陣は国際経済学科の特色でもあり、強力な人的パワーです。しかし、時移り近年はもはや国際化という言葉はやや色あせてきました。むしろ、グローバル化という言葉が今では席卷しています。国際化が後退したのではなく、国際的な相互依存関係がはるかに深化したので、国際化という言葉では、現在の国際的な相互依存関係の影響やインパクトを評しきれず、グローバル化という言葉が世の中に舞い踊るようになったのだと思います。

国際化は日本社会の中で、いや世界で普遍化し、地球上隅々の地の日常の生活のレベルで文字通り日常化したと言っても過言ではないでしょう。あえて国際何々ということは無用、不用になったということでしょう。多くの大学の国際何々という学部や学科は新奇性を失い、必ずしも人気学部、人気学科ではなくなってきました。

しかし、すでに述べましたように、国際化は後退したり、収束したりしたのではなく、ますます拡大、深化しているのですから、われわれはまさにグローバル化という時代にふさわしい新たな脱皮を求められていると思います。大学の「ユニバーサル化」の時代(全入時代)にわれわれは国際経済学科設立時の初志に立ち返って、新たな方向性を模索しなければならない岐路に立っていると思います。国際経済学科の教授陣がかつてのパイオニア精神でグローバル化下の大学教育の在りかたについて熱い議論を始められることを期待します。